慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	H・ガース，ライト・ミルズ共著 山口和男，大伏宣宏共訳 マックス・ウェーバー：その人と業績
Sub Title	
Author	中村, 勝己
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.2 (1963. 2) ,p.194(104)-
JaLC DOI	10.14991/001.19630201-0104
Abstract	
Notes	世界経済特集 新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19630201-0104

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

H・ガース、ライト・ミルズ共著　山口和男、大伏宣宏共訳　『マックス・ウェーバー　――その人と業績――』

本書はウィスコンシン大学教授ガースとコロンビア大学元教授故ライト・ミルズの共著 From Max Weber : Essays in Sociology, N. Y., 1946 の Introduction : The Man and His Work の部分約七〇頁の邦訳である。原書はオクスフォード大学出版部から出版されわが国でも広く読まれていたが、一九五八年 Galaxy Book として紙装版が出されている。この原書は巻頭にここに邦訳されたウェーバーの「人と業績」という序論を載せ、第一編は「学問と政治」と題して「職業としての政治」および「職業としての学問」を収め、第二編には「権力」と題して「経済と社会」および「社会学・社会政策論集」の中から「権力の構造」「階級・身分・党派」「官僚制」「カリスマ的支配の社会学」「規律の意味」を、第三編は「宗教」と題して「宗教社会学論集」から「世界諸宗教の社会理論」「プロテスタント教派と資本主義の精神」「宗教的現世拒否とその諸方向」を、第四編には極めて興味深い経済史的論文「資本主義とドイツ農村社会」、「国民性とユンカー」の外に、「宗教社会学論集」より「バラモンとカスト」および「中国の読書人」を収録している。ウェーバーの著作にはこのほかにも大部の重要なものが多くあるが、ガース及びミルズの編著は、いわばゼミナール用に手際よくダイゼストしてあるわけである。

ここに邦訳された「序論」は、ウェーバーの最もよき内面的理解者たる妻マリアンネによる「ウェーバー伝」を中心に、彼の学問への烈しい精進、病気の苦しみ、アメリカ旅行、「多面的人間像」および「精神の緊張」を扱っていて我々の共感と同情と興味を限りなくそそる。第二章「政治的関心」は政治的知識人ウェーバーが国民主義的立場に立ちつつもビスマルク的・カイザー的専制に強い反感をもち、民主的方向を示している点を指摘する。第三章「知的志向」はウェーバーのマルクス主義観、官僚制とカリスマの日常化を論じて方法論にまで及び、その近代文化観を分析する。

以上の如く、本書はウェーバーを「基督教的ヒューマニスト」や「ブルジョアのイデオローグ」としてのみ扱わず、内在的理解を示す、いわばアメリカ人の見たウェーバー論である。（ミネルヴァ書房・社会科学選書33・二二五頁・三五〇円）

―中村勝己―

＊　＊　＊

野々村一雄著　『ソヴェト学入門』

「ソ連については、ソ連自身が多くを語っている。すなわち、ソ連の各般の問題を説明する書物や資料がいくつもソ連から出されている。また、ソ連社会の本質をなす社会主義についても理論的解説はマルクス以来汗牛充棟もただならぬほど出版されている。だが、ソ連は必ずしもソ連人自身が考えているものと同じではないし、ソ連社会主義は社会主義一般とも違う。そこでロシア人以外の人間が外部から、ソ連を具体的に見て、ソ連についての客観的・綜合的な理解と判断を下す必要が生じてくる。ソヴェト学はこのようにして生まれた。言葉をかえていえば、ソヴェト学とは、ソ連を外から正しく見ることであり、『ソヴェト学入門』とは、ソ連を外から――この場合は日本人としての立場から――正しく見るための、あるいは、綜合的・体系的なソ連を形成するための、一つの手引きということになる」。

以上長々と序文を引用したが、幾分耳新しい「ソヴェト学」という言葉を著者の言葉で説明するためであった。日本語では耳新しいこの言葉は、実は、英語では Sovietology とか Kremmology とかしばしば使われ、最近では中共について Sinology という言葉も使われはじめた。この言葉は主に、ソ連ないしはクレムリンの動向に注意をはらい、革命記念日のときフルシチョフの隣にいるのは誰かなどを調べてソ連政治権力の変化を研究することに使われている。これはいずれも「学」という字をつけているが果たして「学」に値いするのかどうか私には疑問である。野々村氏の「ソヴェト学」はこの意味とはちがって体系的に理解するということらしい。しかし本来経済学とか政治学とか分類されているのは便宜的なもので、その目ざす所は綜合的判断にあるのだから特に「学」といわなくてもいいように思われる。著者が参考文献のところで述べているように、「ソヴェト学」の一般的書物の見当らないのは当然であり、個別的研究こそがソヴェト学の深い研究を示すものなのである。

しかし本書は、ソヴェトの地理・歴史・政治・経済・スプートニク・外交など多くの分野を大へん面白く記述した読み物である。「学」という意味は不明でも、ソヴェトの概観を知る好個の手引書であろう。（中公新書・二一八頁・二〇〇円）

―加藤　寛―

＊　＊　＊

玉野井芳郎編著　『マルクス価格理論の再検討』

P・M・スウィージーが、『資本主義発展の理論』において、ボルトキェヴィツの方法によりながら、マルクスの価値の価格への「転形」について論じて以来、この問題は「転形問題」としてイギリス、アメリカの経済学者の間で活発な議論が展開されてきた。しかしわが国でこの問題が真剣にとりあげられるようになったのは最近数年のことである。このことはわが国の『資本論』研究が、他に例をみないほど進展をしめしていることを考えるならば、まったく不思議なことといわなければならないであろう。あるいは、この現象は、わが国のマルクス経済学者が、「転形問題」を技葉末節の議論とみなし、その背後にひそむ決定的に重要な意味をくみとることができなかったことによるのかもしれない。事実、「転形問題」はこれを議論している人々自身にとっても、かならずしもその意義が明確で